

## 戦後沖縄県の文学と「貧困」 — 「復帰」以降を中心に —

小嶋 洋輔\*

### “Poverty” and the Literature of Postwar Okinawa Prefecture : With a Focus on the Period after Okinawa’s Reversion to Japan

Yosuke KOJIMA\*

#### 要 旨

本論は、「復帰」の時期以降、いいかえれば沖縄県の「日本近代文学」と「貧困」について論じるものである。本論で論じる具体的な小説として、吉田スエ子「天の川の少女」、目取真俊「面影と連れて<sup>うむかじとちり</sup>て<sup>てい</sup>」がある。また、「文化と思想の総合誌」として、影響力を誇った雑誌『新沖縄文学』の「貧困」に関する記事を考察した。

その結果として見えてきたのは、「貧困」、「格差」の諸問題が「沖縄」においては、外＝中央＝「日本近代」から課せられたものというかたちであらわれているということである。「沖縄の文学」に関するこれまでの研究は、「日本近代」とそれにぶつかり、跳ね返される「沖縄」の個人を描くものとして読むことが多かった。そこでいう「日本近代」とは、「政治」的な、時に戦争などの暴力を伴うものとしてあらわれるものであった。だが、今回「貧困」というテーマで、それら作品を読み直してみても見えてきたのは、「日本近代」というシステムには「経済」的な面もあり、小説はそれも写していたということである。これは「沖縄の文学」の新たな側面の発見ということもできる。

キーワード：『新沖縄文学』、吉田スエ子、目取真俊、貧困、日本近代文学研究

#### Abstract

In this Paper, I examine modern Japanese literature in Okinawa Prefecture. “Okinawa Prefecture” refers to the period after reversion to Japan. The specific novels I deal with are Yoshida Sueko’s *Amanogawa no shojō* and Medoruma Shun’s *Umukaji tu tiriti*. Also, as “Bunka to Shiso no Sogoshi” I considered an article on poverty from the influential magazine *Shin Okinawa Bungaku*.

It was found that poverty appeared in the form of a problem imposed by Modern Japan on Okinawa. Previous research on literature in Okinawa has often been read as describing Okinawan individuals and Modern Japan. This “Modern Japan” is quite political, and also appeared in literary works as a violent force, for example in war. But this time, under the theme of poverty, I discovered that Modern Japan had an economic aspect which was reflected in the novel. This could be called a new aspect of Okinawan Literature.

**Keywords:** ‘Shin Okinawa Bungaku’, Yoshida Sueko, Medoruma Shun, poverty, Modern Japanese Literary Studies

\* 名桜大学 国際学群 国際文化教育研究学系 〒905-8585 沖縄県名護市為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1, Biimata, Nago, Okinawa, Japan 905-8585

## 一、沖縄県の文学における「貧困」

「日本近代文学」<sup>1</sup>というジャンルが「日本近代」の産物であり、そこに生きる個々の人間を写すものである以上、「貧困」というテーマは常に傍にあったといえる。「日本近代」というシステムに相対する個人は、「日本近代文学」において社会的弱者として描かれることが多い。そして「日本近代文学」は、そうした弱者に寄り添い、「日本近代」という権力の中心たるシステムを穿つ眼差しを持ち得たといえる。

そして、「日本近代文学」が「日本近代」を批判する視座を有すものであるならば、「沖縄」という場所が「日本近代文学」において重要になることは自明である。「沖縄」は「日本近代」の歴史において、政治的に見ても、経済的に見ても、常に辺境、弱者の位置に置かれてきたといえるからだ。「沖縄」社会を写す「日本近代文学」という表現ジャンルには、「貧困」及び「格差」が様々なかたちであらわれてきた。たとえば、それはまず、中心＝東京をさまよう、貧しい沖縄県人といったかたちであられる。山城正忠「鶴岡という男」(『新潮』1910・2)や山之口貌の初期の詩作はその典型といえるだろう。また広津和郎の「さまよえる琉球人」(『中央公論』1926・3)はその内容とともに、沖縄青年同盟からの抗議を受け、作家の広津自身が作品の抹殺を宣言した一連の事件全体で、「沖縄」の「文学」と「貧困」をめぐる状況を示している<sup>2</sup>。

その後、太平洋戦争における沖縄地上戦、米国による統治期と時代が進む中で「沖縄」の「日本近代文学」は、「日本近代」、「アメリカ近代」に翻弄される個人を描くようになる。そこに「貧困」は一つの状況として、ほぼ必ず描き込まれてゆく。とくに占領期の「貧困」に関しては、「沖縄」出身の作家の作品として2番目の芥川賞受賞作となった東峰夫「オキナワの少年」(『文學界』1971・12)がその好例といえる。

以上のように、「沖縄」と「日本近代文学」と「貧困」の関連については、大まかにまとめることができる。個々の作家、作品ごとに多様に論じることができる問題であり、今後継続して調査してゆく必要がある。だが、本特定研究「沖縄社会の貧困と格差に関する研究」は、全体として「平時」の、そして現代社会の「沖縄社会の貧困と格差」を研究するものであり、その歴史の変遷に関しては、論者ではなく共同研究者である屋良健一郎が担っている。

そこで本論では、「日本近代文学」研究の中でもまだ研究が進んでいない、現在に近い時期を対象として、その特徴を考察してゆきたい。この現在に近い時期とは、「現代」と大まかにはくられる時期であるが、本稿においては1970年代以降の時期とする。つまり「沖縄」に

おいては「復帰」の時期以降、いいかえれば沖縄県の「日本近代文学」を研究するものといえる。

本論の対象とする時代の、「貧困」「格差」について綾目広治は、1960年代末に全共闘運動の「リニューアル」をはかった作家、高橋和巳を論じるなかで、以下のようにまとめている<sup>3</sup>。

格差社会の問題は、前世紀の終わり頃から一部の経済学者や社会学者たちによって指摘されていたが、今世紀に入ってから一般にも注目され始め、今や相対的な格差の問題だけではなく、絶対的な貧困もジャーナリズムにおいて問題にされるようになった。このような、絶対的な貧困の問題を含む格差社会を生んだ大きな要因として、思うがままに人々から収奪しているグローバル資本の存在があることは言うまでもない。資本主義は、少なくとも一九七〇年代以前には福祉や貧困問題にそれなりに気を遣うところを見せていたのだが、しかしとくに一九九〇年前後の旧ソ連、東欧の社会主義政権の崩壊以後は、恐れなければならない〈敵〉がいなくなったからであろう、文字通りの搾取をやりたい放題に行っている。その結果、経済学者などによって報告されているように、例えば現在の日本では、子ども六人の内の一人は貧困の状態に置かれているような事態となったのである。(p.65)

綾目は、半世紀前であれば格差社会とそれを生み出すグローバル資本に対し、左翼的な立場からの対抗運動が強く起こったはずであるが、それが全世界的に弱まり、後退していると述べる。左翼的な立ち位置を取り、人気作家であった高橋和巳が、現在忘れられた作家になっていること自体が、そうした左翼的な立場の後退を象徴的に示しているともいえる。では、子どもの貧困に関して、現在もっとも深刻とされる沖縄県の状況は、「日本近代文学」にどのようにあらわれてきたのだろうか。

## 二、吉田スエ子「天の川の少女」

吉田スエ子の「天の川の少女」は1985年6月発行の『新沖縄文学』に掲載された<sup>4</sup>。吉田は前年の新沖縄文学賞を「嘉間良心中」で受賞しており、その受賞後第一作ということにこの「天の川の少女」はなる。「天の川の少女」はヤエという少女が主人公の小説である。ヤエの環境は中学入学を契機に大きく変化する。

ヤエは三月に山原の村からこの町に来た。一緒に暮らしていた祖父が死んだので、結婚してこの町に住んでいる母親に引き取られたのだ。ヤエはほんとう

の父親を知らない。母が、那覇で働いていた頃できたひとり子だ。(p.221)

三歳の時、母親が結婚した。ヤエは母方の祖父に預けられた。祖父が死んだ去年の暮れ、大阪で働いていたサチ叔母さんが帰って来た。母親の妹である。ヤエは六年生の三学期はサチ叔母さんと暮らした。このまま叔母と暮らし、叔母のもとから町の中学へ通えるものとばかり思っていた。(p.222)

この引用からわかるのは、まずヤエが山原＝やんばる出身だということである。小説家吉田もやんばるの出身ということであるが、「近代文学」という表現ジャンルにおいてやんばるという場所が象徴するイメージは大きい。「日本近代」において、その辺境が「沖縄」だとするならば、やんばるは「沖縄」の辺境といえる場所だからである。

そして、上記引用を読み進めるならばヤエが「父無し子」、「シングルマザー」の子どもであり、母の再婚に伴い祖父とやんばるで暮らしてきたことがわかる。それが祖父の死、叔母の結婚により、母と義父と義弟と暮らすことになった。結果ヤエは、その他者である義父から執拗な暴力を受けることになる。

仕切りの板戸が開いて、恐ろしい顔をした父親がとびこんできて掛け布団を剥いだ。髪をつかんで引きずりまわし、箒の柄で殴りつけた。何が何やらわからなかった。寝間着のホックがはずれ、胸がはだけた。ヤエははだけた胸を両腕で抱えこむ格好でうずくまった。羞恥と恐怖でからだ固くなった。寝間着の裾をつかまれ、畳の上をひきずりまわされた。肌着が背中までめくれ上がった。夢中で下着をおさえていた。ヤエも父親も一言もくちをきかなかった。荒い息を吐きながら、箒を振り続ける父親が言葉の通じない魔性のものに見えて怖ろしかった。(pp.219-220)

この描写からは、義父からの暴力が性的なものへと進む可能性を強く示唆していることがわかる。この引用場面は、ヤエの置かれた危険な状況を、読者に強く印象づけることになる。ヤエは中学に入学したばかりの思春期の少女であり、大人の女性と少女の狭間にいる存在といえる。そしてヤエは絶対的な弱者であり、強者＝義父により性暴力を受ける直前にあるのである。さらにいえば、ヤエは家庭の事情でこの状況に追い込まれているわけで、自身に責任はまったくない。いわば「沖縄」の「貧困」が生んだ被害者としてヤエはある。そして、ヤエは自身が育ったやんばるを、以下のように想起する。

雲の向こうから死んだ祖父の声が聞こえてくるような気がする。山原へ帰りたい。懐かしさが胸いっぱいこみあげてくる。(p.221)

ヤエにとってやんばるは「帰りたい」「懐かしい」場所であり、本来いるべき場所なのである。だが、その場所は自身の出自の関係で、ヤエが好意を抱く同郷出身の教師にも話すことができない場所としてもある。やんばるは自分があるべき場所なのだが、戻ることが困難という、ヤエにとっての失われた場所ともいうべき場所となっているのである。

それに対してヤエが現在暮らしている「この町」は基地の町である。母親も「米軍のランドリィに勤めている」と記されている。

ヤエはこの町に来てからよく夢を見た。得体の知れないなにかの呻り声に押しつけられるような怖い夢だ。何故そのような夢を見るのか来て間もない頃はよく分からなかった。それがのべつ地面を震わしている爆音のせいだということがこの頃になってよくわかった。(p.225)

近くに「外人ハウスの建ち並んだ新興住宅街」のある「この町」は、「大通りを左に折れ」と国道58号線に出る場所であり、沖縄本島中部のどこかを想起させる町である。ヤエにとってこの基地の町は、逃げ出したい場所として描かれている<sup>5</sup>。

そしてここで興味深いのが、ヤエが向うべき先としてやんばるではなく、「(ナハへ行こう。ナハへ行って仕事を見つけてよう)」と、「ナハ」「那覇」を選んでいるという点である。つまり「天の川の少女」は、実際の地名を描くことでその地名がはらむ象徴性を浮かび上がらせる作品としてあるのである。ノスタルジックな、帰りたいけれど帰れない場所としてのやんばると、未来を託すべき場所としての那覇、そして逃げ出したい現状を象徴する場所としての基地の町である。そして、ヤエがやんばるに戻れないこと、そこにおそらく「貧困」の問題があるように思う。やんばるに戻っても、ヤエを追い詰めた出自などの状況は変わらないのである。

「天の川の少女」が、発表時である1985年を作品の舞台にしているなら、ヤエは1972年から1973年生まれ、いわゆる「復帰っ子」の世代である。「天の川の少女」は「復帰っ子」の抱えていた「貧困」状況を写し出した小説としてまず評価されるべき作品といえる。だがそうであるならばなお、ヤエが巻末で置かれる状況は厳しい。ヤエは義父の金を一万円盗み、那覇行のバスに乗ろうとするが、釣り銭が無いといって運転手に乗車を拒否される。そこで金をくずすために入った洋品店で「ブラジャー」

など、自らを女性として着飾る品を購入、さらに欲求に応じるかたちで「ケンタッキー・フライドチキン」を食べ、手元には小銭しか残らないことになる。そして那覇へ「国道58号線」を「歩いて行こう」と決断する。これはヤエが大人の女性として那覇に向うことを象徴的に暗示するとともに、その前途が困難であることをも暗示するものといえよう。那覇は沖縄県の「日本近代」の中心であり、弱者は淘汰される。淘汰されないように女性は、その女性性を武器として生きてゆくしかないことをヤエは知ることになるかもしれない。

### 三、『新沖縄文学』

『新沖縄文学』とは、復帰前の1966年に創刊された総合文芸誌である。発刊は沖縄タイムス社が行っていた。最終号は1993年の5月で通号は95を数える。「二」で考察を加えてきた、吉田スエ子「天の川の少女」もこの雑誌掲載作品である。さらにいえば、先に見たように吉田は『新沖縄文学』の小説賞である新沖縄文学賞を、「天の川の少女」の前作「嘉間良心中」で受賞しており、そうした事情から「天の川の少女」は『新沖縄文学』という雑誌の特色が色濃い作品であるということもできる。

創刊号の目次を見ると、創作欄（3作品）、戯曲欄（1作品）、詩劇欄（1作品）、詩欄（5作品）、短歌欄（10作品）、俳句欄（7作品）と、いわゆる文芸欄で占められている。これに、池田和、嘉陽安男、船越義彰、矢野野暮による座談会「沖縄は文学不毛の地か」および掲載作品の選評で構成されている創刊号は、そのタイトル『新沖縄文学』に見合った文芸誌的構成の雑誌だったといえる。しかし、創刊5周年となる20号からは、表紙のタイトルの上に「文化と思想の総合誌」と付されるようになり、最終号に至る。雑誌の特徴について、最終号の挨拶文「『新沖縄文学』の休刊に当たって」では、「本誌は、一九六六年に沖縄における文学活動振興の一環として発刊以来、文学作品発表の場として、また時代の要請に応えるべく“文化と思想の総合誌”として、力を尽くして参りました」と述べられている。つまり、当初からの雑誌の目標は「文学活動振興」であり、「文学作品発表の場」となることだったが、「時代の要請」によって「総合誌」の色を含んでいったということである。ただ、編集委員長交代が5名、6回行われた雑誌であり、その都度誌面の構成が大きく変化した雑誌でもある。詳細な雑誌研究が待たれるところである<sup>6</sup>。

「総合誌」的特色は、正確には懸賞論文「私の内なる祖国」の選考結果が発表された、1969年8月発行の14号から、政治、経済に関する記事が見られるようになる。「思想と文化の総合誌」というモットーは14号以降踏襲されており、文学作品を掲載するだけの文芸誌ではなく、社

会、政治、経済などを論じる評論も多く掲載された雑誌、総合文芸誌としてこの『新沖縄文学』は位置づけられる。では、その誌面構成を確認するために沖縄から新しい書き手の誕生を期待して創設された、新沖縄文学賞の第一回受賞作が発表された30号の目次を見てみよう。この号を例示するのは、新沖縄文学賞が雑誌終刊後も現在に至るまで続いている文学賞であり、沖縄県の文学を特徴付け続ける文学賞が誕生した記念碑的な号といえるからである。さらにいえば、編集長が創刊から牽引してきた牧港篤三から、より社会批評の色合いを濃くし、のちの路線を確定させた新川明に代わったばかりの時期ということもある<sup>7</sup>。

第30号は、まず「特集」が「女性問題を考える」であり、これに関わる対談と論文8本、エッセイ「沖縄の女性」に7本、そして資料として由井晶子「沖縄の女性に関する文献目録」が掲載されている。これに詩欄（2作品）、短歌欄（2作品）、俳句欄（2作品）、エッセイ欄「私の青春」（5作品）と創作文芸欄が続く。さらに「研究報告」欄、政治、経済、文学、農業、思想、芸能の時事問題を評する「潮流」欄、「海外ジャーナル」欄と続く。連載欄は外間守善の「沖縄古語探訪」、由井晶子によるインタビュー「沖縄現代史への証言」が掲載されている。そして新沖縄文学賞の第一回決定発表である。受賞作は「なし」で、佳作とされた又吉栄喜「海は蒼く」、横山史朗「伝説」が掲載、島尾敏雄、大城立裕、牧港篤三による選評が付されている。最後に「書評」欄、グラビア欄となる。

以上のように、例としてあげた第30号は、まさしく「文化と思想の総合誌」といえる誌面構成であることが理解される。いわば戦後、高度経済成長期の『文藝春秋』的な誌面構成といえる。だが、その掲載作の内実を見ると、「沖縄」という場所に寄り添い中央を穿つ、「革新リベラル」的、左翼的な言説が多いことがわかる。その意味では文芸面を重視した『世界』のような雑誌ということもできる。つまり『新沖縄文学』は、表現ジャンルである文学と現実社会の問題との距離を近くに置く編集方針の雑誌なのである。この雑誌を研究考察することは、文学を通して実社会を見る、ないしは実社会を通して文学を見る、そうした視点の変遷を追うことにつながるものとなる。

本論ではまず、『新沖縄文学』全95号の中にある、沖縄社会と「貧困」をめぐる記事を抽出するところから始める。まず、すでに見た広津和郎「さまよへる琉球人」の復刻を行った1970年8月の17号があげられる。作者広津の意図に反して、沖縄差別や、沖縄の「貧困」が読み取られたこの作品を復刻した、「復帰」2年前発刊のこの号は、沖縄社会と「貧困」とその乗り越えを考える上で興味深い<sup>8</sup>。

以下、「貧困」、「格差」問題に関連があると思われる

文章を発刊順に列挙してゆく。

- ① 「《要望書》沖縄の文化と自然を守る要望書—沖縄喪失の危機・海洋博を告発」(1974・1 25号)
- ② 【特集】崩壊する沖縄 比嘉政夫「崩壊する村落社会」(1974・10 26号)
- ③ 【特集】崩壊する沖縄 安里清信「開発と自然社会」(1974・10 26号)
- ④ 【特集】沖縄・戦後三〇年 松田賀孝「沖縄における社会経済構造の歴史的変容について」(1975・2 27号)
- ⑤ 【特集】沖縄・戦後三〇年 山門健一「過剰人口の歴史—沖縄自立経済論の変遷」(1975・2 27号)
- ⑥ 【小特集】海洋博と住民運動 新崎盛敏「海洋博をめぐる諸問題」(1975・4 28号)
- ⑦ 【小特集】海洋博と住民運動 国吉真永「ニライから来た桃太郎—海洋博会場周辺の不安と絶望」(1975・4 28号)
- ⑧ 【特集Ⅰ】海洋博を総括する 新崎盛敏「各国出展物と跡地問題」(1976・6 32号)
- ⑨ 【特集Ⅰ】海洋博を総括する 松田賀孝「海洋博の残したものと—その経済的傷あと」(1976・6 32号)
- ⑩ 【特集Ⅰ】海洋博を総括する 中里友豪「四千億円の犠牲と教訓」(1976・6 32号)
- ⑪ 【特集Ⅰ】海洋博を総括する いれい・たかし「まつりの終焉—その黙示録的意味」(1976・6 32号)
- ⑫ 勝連哲治「多難な沖縄経済—八方ふさがりの実態と構造」(1977・5 35号)
- ⑬ 山門健一「自立経済への視点—いま、何が問われているか」(1977・10 36号)
- ⑭ 三輪隆夫「経済開発の方向」(1977・10 36号)
- ⑮ 原田誠司・矢下徳治「沖縄自立経済のために—沖縄経済の現状と自立経済的方法的—視点」(1978・9 39号)
- ⑯ 【特集】80年代・沖縄は生き残れるか 勝連哲治「80年代の地域経済像—沖縄・自立経済への展望」(1979・11 43号)
- ⑰ 川満信一「沖縄・自立と共生の思想」(1980・3 44号)
- ⑱ 【特集】琉球共和国へのかけ橋 (1981・6 48号 計17のエッセイ、座談会1つ、対談2つ、論文4本に資料というかたちで構成された特集)
- ⑲ 【特集】沖縄にこだわる—独立論の系譜 川満信一「独立論の位相—ナショナリズムの敗北を超えて」(1982・9 53号)
- ⑳ 【特集】沖縄にこだわる—独立論の系譜 「沖縄自立・独立論関係図書目録」(1982・9 53号)
- ㉑ 【特集】戦中・戦後の飢えと民衆 (1983・3 55号 エッセイ1本、座談会1つ、論文4本、公募体験談6本、

資料というかたちで構成された特集)

- ㉒ 【特集】自立経済を考える (1983・6 56号 論文5本、現況報告3本で構成された特集)
- ㉓ 【特集】84病める沖縄 金城朝夫「開発と島社会の荒廃」(1984・3 59号)
- ㉔ 【特集】84病める沖縄 東清二「開発行政と自然破壊」(1984・3 59号)
- ㉕ 【特集】病めるマスコミ—体質を問う 保坂廣志「海洋博・国体とマスコミ」(1987・12 74号)
- ㉖ 【特集】ポスト国体・どうなる沖縄 (1988・3 75号 エッセイ5本、論文8本で構成された特集)

『新沖縄文学』に掲載された「貧困」、「格差」の諸問題に関わるような記事の大きなものは以上のようになる。「潮流」欄のような短文の経済記事は除外した。

下線で示したように、「貧困」、「格差」の諸問題が「沖縄」においては、外＝中央＝「日本近代」から課せられたものというかたちであらわれているということが見えてきた。それは、端的にいうと「開発」という言葉にあらわれている。そしてそれが具体化したものといえるのが「海洋博」<sup>9</sup>であり「国体」<sup>10</sup>なのだといえる。またそれが逆に転じると、「自立」、「独立」という言葉となってあらわれることになる。「開発」や「自立」「独立」という語が指し示す内実は年代によって異なるだろうし、一つ一つの論でもそれが異なるだろう。だが、『新沖縄文学』掲載論のタイトルからのみ、その大きな流れを見ることで、上記のような構図を把握することができる。

このような把握は、⑩の中里友豪「四千億円の犠牲と教訓」からも保証される。少し長くなるが引用する。中里は「沖縄における現代思想のエコール」<sup>11</sup>ともいわれる『琉大文学』の一員であり、現在も活躍する詩人である。あらゆる権力が集まる中央＝「ヤマト」への中里の鋭い眼差しは、この文章においても健在である。

私はいま、言いようのない気持で、あの少女たちのことを考えている。飯場の本土出身の労務者たちに強姦され、入れ墨まで刻み込まれたあの少女たちである。それは直接的には「海洋博」とは関係のない事件であった。しかし間違いなく、「海洋博」を中心とした狂乱の中で起きた事件であった。(中略)／この少女たちの受けた傷を凝視していると、またさらに多くの傷が、眼前に広がってくる。「復帰記念行事」はすでに述べたごとく体制への同化を促進するものであったわけだが、換言すればそれはまた、一般庶民へ第二の悪しき近代体験を強いるものであった。ここで言う悪しき近代体験とは、資本の力に蹂躪されることである。明治以来、鹿児島商人に代表されるように、ヤマトの商人たちによって沖縄

の土着の商業、産業、文化は牛耳られ踏みにじられてきた。いままた本土の大手資本によってズタズタに引き裂かれ、その亀裂から凶悪な犯罪が噴出し、人心の荒廃、社会不安、経済混乱はその極に達している。これらはすべて「海洋博」に起因している。(p.59)

中里は「海洋博」を、明治期に次ぐ「第二の悪しき近代体験」、すなわち「資本の力に蹂躪」される体験だと述べる。「海洋博」により中央＝強者＝富者、辺境＝弱者＝貧者という二項対立が再認され、そうした空間のなかで本土の労働者による少女強姦のような事件も起こってしまったというのである。中央と辺境という、単純な二項対立に帰結しない中里のこうした沖縄という「場」の把握(時間・空間の把握)は、「沖縄」ならではといえるものである。それは延いては『新沖縄文学』という言葉の場が産出していったものといえるかもしれない。ある意味、本特定研究「沖縄社会の貧困と格差に関する研究」の研究分担者として、「貧困」のテーマを与えられたからこそ、見直すことになった『新沖縄文学』であったが、文学史を構成する重要なピースであることがわかった。それは「沖縄文学史」の問題にとどまらないものといえる。

そして、こうした空間を感覚としてつかむのには文学という表現ジャンルが有効に機能するといえる。次節においては、この中里の感慨を20年後に小説化したような作品、目取真俊「面影と連れて」を用いて、その表象の内実について論じる。

#### 四、目取真俊「面影と連れて」と「海洋博」

目取真俊の「面影と連れて」は、1999年3月、『小説TRIPPER(トリッパー)』1999年春季号に掲載された作品で、その後景に「海洋博」とひめゆりの塔事件<sup>12</sup>が置かれた作品としてある。正確にいうならば、「戦争が終わってから十年ぐらい」経過した沖縄島北部＝やんばるの村で生まれ、暮らした主人公「うち」が23歳になるまで、つまり1955年前後から、1978年前後が舞台の作品である。

「面影と連れて」は目取真の作品の中でも先行研究が豊富にあるものである。本論の元となった特定研究シンポジウム「沖縄社会の貧困と格差」(2019・2・2)の発表以降にも、日本近代文学研究における最大の学会である日本近代文学会の機関紙『日本近代文学』に仲井眞健一「目取真俊「面影と連れて」論―「光」の記憶を(聴く)―」(2019・5)が発表されている。本作品の研究における位置付けや、テキスト読解で問題となってきた議論(「うち」の一人語りの問題など)はこの仲井眞論

に詳しいのでこちらを参照されたい<sup>13</sup>。本論では、中央との経済格差の象徴として『新沖縄文学』でも扱われていた、「海洋博」と小説という観点から本作品に迫りたい。「面影と連れて」で「海洋博」は、成人した「うち」が働くスナックに集う、客＝労働者の増加というかたちで描きこまれる。

その頃はちょうど海洋博というのがあってね、同じ北部で会場建設をやってるもんだから、道路整備とか民宿建設とかもあるしね、那覇、南部だけでなく本土からも働きに来ていて、うちの村にも建設業者の宿舎ができてね、とても飲み屋は賑わっていたさ。／あの人もね、海洋博の工事で来た労働者のひとりだった。うちが入る少し前から店に顔見せるようになっていたらしいけどね。同じ現場の人たち四、五名と飲みに来るんだけど、無口な人でね、他の人がわあわあ騒いでいる時も黙ってね、飲んでばかりいたさ。(pp.54-55)

この引用からは、「海洋博」の「会場建設」によってやんばるが賑わった様子が伝わってくる。「うち」の「神懸り」の能力を理解する、「うち」のよき会話の相手となり、結末部の「うち」の死にもかかわる「あの人」もまた「海洋博」の建設工事に紛れ、やってきた存在だった。「あの人」自身が「うち」に語って聞かせたところによると、「八重山の出身で、本土の大学に行ってたけどやめて帰ってきたとかね、沖縄ではガードマンをしたり、港で仲仕したり、塗装業のアルバイトしたりね、いろんな仕事を」してきたが、「海洋博」で北部が建設ブームになって、半年くらい前から海洋博会場で建設作業してる」とのことである。これは、「あの人」がひめゆりの塔事件に関わった人物であることが明らかになることで、その信憑性は疑われるものとなるが、こうした事情の人間がやんばるに集まっていたことは事実であり、それを背景につくられた小説ということができる。先の仲井眞論においても、後景にある「海洋博」は問題視されており、次のように規定されている。

一九六八年に発表された本土復帰は、基地を残したままの復帰であるという点で禍根を残し、人々を復帰派、独立派など様々に分断した。しかし軍事基地を争点とする議論は次第に影を潜め、経済的な側面が強調されるようになった。世論の大勢は本土復帰へと傾いていく。復帰事業の目玉が、一九七五年に予定された海洋博である。大阪万博を模した海洋博は開発の起爆剤として多様な公共事業を計画し、「本土並みの経済」という旗印のもと、沖縄につかの間の好景気をもたらした。農家は土地を売り土建業者

の下請けとなり、農協資金や特別融資制度を利用した観光客用の旅館・民宿ラッシュがおこった。本土の大手ホテルの進出も急増し、海洋博には名誉総裁として皇太子が来沖するなど、経済とナショナリズムとが複雑にからみ合い、日本との一体化に焦点は結んでいったのだ。(p.65)

この仲井眞の「海洋博」と「沖縄」の状況概観は大変簡潔に、その重要な問題を指摘している。「政治」の問題に疲労したのちに、目隠しをするように「経済」の問題が到来したということである。「本土並みの経済」という「旗印」は、それを明確に示している。見返りに与えられた利益のために「土地」を売ったことで、旧来の共同体社会、文化は廃れてゆく。これを米軍統治下における強制的な土地収用と比較すれば明らかだが、「経済」による「蹂躪」は一見ソフトであるが、結果は力によるものと変わらない。

こうした「経済」による祝祭的な雰囲気<sup>うむかじとうちりてい</sup>が海洋博の開始とともに終息してゆく様子もまた「面影と連れて」には描き込まれている。

だけどそのうちね、お店の客も少なくなってね、海洋博が始まったら建設工事に来ていた人たちはみな那覇、南部に戻ってしまったし、かんじんの海洋博も全然ぱっとしなくてね、大和<sup>やまと</sup>からのお客もほとんど来ないし、来てもうちなんかみたいな田舎の Snackbar には入らんさ。あちこちの民宿とかパーラーも客が入らんくてどんどん潰れてね、うちなんかの店も客が少なくなって、他の地域から来ていた姉さんたちは、やめて中南部に戻って行ったさ。(p.68)

「海洋博」による好景気がまさに「つかの間」のものであったことを、「面影と連れて」<sup>うむかじとうちりてい</sup>は、その後景に置くことで、この時期の沖縄県の状況を書くことでしか書けないものを書こうとした作品ということが出来る。そして主人公「うち」は皇太子夫妻に対するテロ事件へ巻き込まれてゆくのである。「うち」は警察署に何度も連れて行かれ、事情聴取を受ける。そこで、刑事たちのものとして「うち」に語られる、「普通の人には声もかけられないぐらい偉い人たち」、「コータイシデンカ」を襲った「あの人」のせいで、「沖縄の人は物分かって大和の人たちからまた差別されるさ」という言葉は興味深い。こうした「沖縄」の刑事たちの言葉からは、その内奥にこびりついている「大和」＝中央への劣等感のような物が透かし見える。だがここで重要なのは、「海洋博」にまつわる状況のなかで、もっとも弱者である「うち」が最大の被害者になるということである。この作品の顛末を語ってきた「うち」が、結末部になってすでに、「男

たち」からの激しい暴力の末に死んだ存在であることが明かされる。「うち」が生前見ていた「ガジマルの木の枝」に集う霊となって、霊の見える「神懸り」の「女子童」<sup>いなぐわらび</sup>に語りかけていたのである。

そして忘れてはならないのが「うち」の出自である。弱者であり、最大の被害者となる「うち」が「沖縄」の「神女」<sup>かみんちゆ</sup>なのであった。「うち」は、その語りの冒頭、以下のように自らの出自について語っている。

根神屋<sup>にがみや</sup>とってね、うちのおばあは部落の神女<sup>かみんちゆ</sup>のなかでもいちばん偉い根神をやっている、小さい頃のうちはいつもおばあの後ばかり追っていたさ。(中略) おばあたちが白い神衣装を着てね、頭に木の葉で作った冠かぶって、輪になって、神歌を歌っているのをうちもそばで見ながら真似してね。拝所<sup>うがんじゆ</sup>にごちそう並べて拝む時には、後ろの方で手を合わせて、よくおばあに、うちもおおきくなったら神女になるからね、ってね、言っていた。(p.44)

ただ、こうした家に生まれ育った、「うち」のような「霊力の高い」、「神懸り」の人物が生き難い時代に変化してきたこともこの作品は描いている。土地の信仰の力が「近代」のシステムによって弱体化してきている様を描いているのである。そしてそうした土地、共同体の信仰の力は「海洋博」の前から、弱体化していることも「面影と連れて」<sup>うむかじとうちりてい</sup>は明示している。それは「走るのも、物覚えるのも」、「何させても遅い」、「うち」が、村の学校で「いじめ」を受け、学校に行かなくなることからも理解される。「前近代」であれば聖性を保証するような他者との差が、平準化を求める「近代」システムのなかでは、排除の対象となることをこの「うち」に対する「いじめ」は表象している。

こうした「うち」の状況は、『新沖縄文学』の掲載論文のタイトル、②「崩壊する村落社会」や③「開発と島社会の荒廃」などが想起される。先の中里の言葉を借りれば、やんばるの「うち」の「シマ」、共同体は、「近代」すなわち「資本によって蹂躪」されたのである。それが1974年に書かれた②「崩壊する村落社会」の対象が沖縄本島であり、十年後の1984年に書かれた③「開発と島社会の荒廃」が論じる先が八重山であることは興味深い。「近代」「資本による蹂躪」も、辺境へ辺境へと進んでいることを示している。

そうした沖縄県の「復帰」以降の状況の推移を、小説家目取真俊がすべて見た上で、その契機として「海洋博」<sup>うむかじとうちりてい</sup>を置き小説化した作品として、この1999年の「面影と連れて」はある。時代状況を抜きにして読むことのできない小説ということもできよう。そこで描かれていたのは、まず、「経済」の面からの「日本近代」の攻撃による、

旧来の「沖縄」の共同体の崩壊である。戦争などの暴力を伴う「政治」的な「日本近代」からのアプローチではなく、「復帰」以降は一見「国」とはつながらない、「見えない」、「柔らかな」、「経済」的な圧力が、沖縄県にかかっていたといいかえてもよい。そうした問題はその同時代から、「海洋博」の準備期間やそれを総括する『新沖縄文学』の記事に多くあらわれていた問題でもあった。

ただ、聞き手である「女子童」の存在はポジティブに受け取れるように思う。絶対的な弱者として描かれた「うち」の声が届く先がある、ということだからである。

うちがここに来るのはね、このガジマルの木の下がね、昔も今もうちの心が安心できる場所だからさ。ここでこうやって川を眺めているとね、もう建物も何もなくなってしまったけど、あの向こうの川岸にね、あの人が立っていてね、うちのことを見ていてくれる、そんな時が来るんじゃないか、という気がしてね。／ごめんね、こんな長話をして。あんたみたいな小さな女子童にね、こんな話を聞かせてね。でもね、あんたはうちみたいになってはいけんよ。絶対にね。ああ、小魚の群れが川を上がっていくねえ、光がきらきらしてね、あの人もどこかでこの光を見ているのかねえ……。 (p.75)

「海洋博」の象徴である、建設工事労働者の住むプレハブは「なくなってしまった」が、「ガジマル」と「川」とそこに映る「光」はまだ残っている。破壊されたものの再生の可能性を読み取るのは、深読みが過ぎるだろうか。1990年代末に書かれた、目取真の短篇群、「魂込め」<sup>14</sup>、「帰郷」<sup>15</sup>などにもそうした再生の可能性が描かれているように思う。比較考察が今後の課題である。

## 五、おわりに

以上、「復帰」の時期以降、いいかえれば沖縄県の「日本近代文学」と「貧困」について論じてきた。吉田スエ子「天の川の少女」には、沖縄県内の地域による経済格差が、「貧困」により不遇な状況にあるやんばる出身の少女ヤエを通して描かれていた。すなわちノスタルジックな場所としてのやんばる、「怖い夢」を見る場所であり、少女が現在住む基地の町、そして、大人になり行くべき場所としての「那覇」である。そして、その希望を託す場所である「那覇」が、必ずしも幸福な場所では無いということも作品には書き込まれていた。少女が大人の女性として那覇に向うことが、巻末象徴的に暗示されていたことはそれを示している。

次に、「復帰」前後から「沖縄」の言説空間を牽引してきた「文化と思想の総合誌」、『新沖縄文学』の「貧困

に関する記事を分析した。結果、「貧困」、「格差」の諸問題が「沖縄」においては、外＝中央＝「日本近代」から課せられたものというかたちであらわれていることがわかった。そしてその象徴的なものが、「海洋博」といった。

そして「海洋博」を、二十数年経過したのちの眼差しでもって小説化した作品が目取真俊の「面影と連れて」であった。この作品にはソフトな「日本近代」といえる、経済資本による沖縄県への圧力が時代背景として描かれていた。「国」＝ヤマトウの姿を直接には見えなくさせる、「経済」的な「日本近代」システムは、「沖縄」の文化伝統をやわらかに崩壊させてゆく。これを「神女」の「うち」の短い人生に象徴化して描き込んだのである。

「沖縄の文学」に関するこれまでの研究は、「日本近代」とそれにぶつかり、跳ね返される「沖縄」の個人を描くものとして読むことが多かった。そこでいう「日本近代」とは、「政治」的な、時に戦争などの暴力を伴うものとしてあらわれるものであった。今回「貧困」というテーマで、それら作品を読み直してみても見えてきたのは、「日本近代」というシステムには「経済」的な、ソフトな面もあり、小説はそれも写していたということである。今後まず行うべきは、そうした特徴を持つ作品を網羅的に分析することである。たとえば、リゾートホテル建設と自然、文化破壊、観光と自然、文化破壊の問題も、時代を写す文学には描かれているはずである。調査を継続したい<sup>16</sup>。

## 注

<sup>1</sup> 本稿の対象である戦後の「沖縄」の「文学」を「近代文学」と定義するのに違和も感じる。だが、近代文学研究の場において、「現代文学」という語は確定していない。そこで本稿ではカギ括弧を付すかたちで「近代文学」という語を用いたい。

<sup>2</sup> 広津和郎「さまよえる琉球人」をめぐる状況の把握、理解については仲程昌徳『広津和郎 さまよへる琉球人』（同時代社、1994・5）にある「「さまよへる琉球人」解説」が詳しい。本解説は、「復帰」直前の1970年に「さまよへる琉球人」が復刻された状況についてもまとめられている。「沖縄」の「近代文学」における「貧困」というテーマにおいては、扱うべき対象となるが、本論の射程範囲の外としたい。

<sup>3</sup> 綾目広治「高橋和巳の変革思想—二一世紀から照射する」太田代志朗・田中寛・鈴木比佐雄『高橋和巳の文学と思想—その〈志〉と〈憂愁〉の彼方に』（コールサク社、2018・11）

<sup>4</sup> 「天の川の少女」は未書籍化小説であり、先行研究も管見に入る限り見つかっていない。ただ、本作を紹

介した名桜大学編『文学と場所』（沖縄タイムス社、2016・12）の小嶋洋輔「やんばるは小説家の宝庫だ」がある。そこで「天の川の少女」の発表を1988年と記している。誤記である。ここで訂正させていただきたい。

<sup>5</sup> 「天の川の少女」において、この基地の町の描写は消化不良なところがある。ヤエが基地のアメリカ人家族を描写する場面があるのだが、そこでヤエが見るアメリカの父親は、息子の言い分を受け止める度量を持った父らしい父である。「あるべき父」の姿を基地内に見るという構図であるなら、大変興味深い問題をはらんでいるが、この問題はこの小説で以降発展することはない。

<sup>6</sup> 歴代編集長は、牧港篤三（創刊号～27号）、新川明（28号～47号）、川満信一（48号～64号）、屋富祖仲啓（65号～76号）、國吉永啓（77号～88号）、川満信一（89号～91号）となる。『新沖縄文学』に関しては、加藤宏「（沖縄文学）場の研究(1)－「新沖縄文学」を手がかりとする制度論的アプローチ」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』（2004・3）などの先行研究がある。

<sup>7</sup> 最終号掲載の「本誌歴代編集長インタビュー」によると、二代編集長である新川明が「十五号前後」から編集に関わっていることがわかる。新川が「文化と思想の総合誌」に舵を切った立役者といえる。

<sup>8</sup> 注2参照。

<sup>9</sup> 「海洋博」とは、沖縄国際海洋博覧会の略称である。「復帰」記念事業沖縄返還、沖縄県国頭郡本部町で開催された。1975年7月20日から1976年1月18日の183日間の会期である。

<sup>10</sup> 「国体」とは、1987年開催の「海邦国体」を指す。9月20日から23日および10月25日から30日の期間開催された。バブル契機とも相まって、新しいリゾートホテルが恩納村を中心に建設された。国旗を燃やす事件やそれに対抗する右翼活動家からの破壊行為などが相次いだ。

<sup>11</sup> うる文化協会「沖縄文学資料調査委員会」編『琉球・島之宝』（創刊号、2014・3）の【雑誌総覧】内、比屋根薫「新沖縄文学」のなかの言説から引用した。

<sup>12</sup> ひめゆりの塔事件とは、「海洋博」開催に際し来県し、ひめゆりの塔を参拝していた皇太子明仁・美智子夫妻に過激派メンバーに火炎瓶を投げつけられた、1975年7月17日の事件を指すことが多い。これに、同日白銀病院から、ひめゆりの塔に向かう皇太子夫妻を乗せた車列への、火炎瓶投擲事件を合わせていう。皇族の来沖は戦後初めてのことであった。

<sup>13</sup> 仲井眞は目取真俊の文学について、「目取真俊は一貫して死者の記憶とその継承を問題化してきた」とし、

その傾向が芥川賞受賞以降顕著となり、なかでも『小説トリッパー』に掲載された「面影と連れて」は、死者の記憶をどのように〈聴く〉のか、という受容態度を問題化したものだったと規定している。先行研究との真摯な対話をしつつ、自論を展開する好論である。

<sup>14</sup> 目取真俊「魂込め（まぶいぐみ）」（『小説トリッパー』、1998夏季号）

<sup>15</sup> 目取真俊「帰郷」（『小説トリッパー』、1999秋季号）

<sup>16</sup> たとえば、池上永一『ぼくのキャノン』（文藝春秋、2003・12）などがその事例といえるだろうか。

#### 参考文献（注記したものは除く）

新崎盛暉『沖縄現代史 新版』（岩波書店、2005）

沖縄文学全集編集委員会編『沖縄文学全集』（第6巻、第7巻、第8巻、第9巻 国書刊行会、1990、1993（6巻））  
飢餓陣営・佐藤幹夫編『沖縄からはじめる「新・戦後入門」』（言視舎、2016・7）

『新沖縄文学 総目次』（沖縄タイムス社、1993）

仲程昌徳『小説の中の沖縄』（沖縄タイムス社、2009・3）

仲程昌徳『広津和郎 さまよへる琉球人』（同時代社、1994・5）

目取真俊『目取真俊短篇小説選集3』（影書房、2013・11）

森宣雄『沖縄戦後民衆史－ガマから辺野古まで』（岩波書店、2016・3）

屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす』（世織書房、2009・10）

#### 【付記】

※ 本論文の引用は、原則初出を用いた。「面影と連れて」は『面影と連れて 目取真俊短篇小説選集3』を用いた。

※※ 本論文は、名桜大学総合研究所（現環太平洋地域文化研究所）特定研究「沖縄社会の貧困と格差に関する研究」の助成を受け、成されたものである。

※※※ 同時に本論文は、JSPS基盤研究C「琉球弧における島尾敏雄受容史の構築」（課題番号16K02413）とも連関する研究成果である。